

死ぬことは考えられない

優れた特別養護老人ホーム岩手県「敬愛園」のデイセンターの広報紙、あるお年寄りの話―

私はデイセンターに通っています。初めて機械で動く風呂に入れてもらった時、このことだったか、と子供に言われたことを思い出した。それは、「もし私がこんな大きな体をしていて、あたって（脳卒中）臭うなったら……」と言うと、「オレがちゃんど洗ってやる。大丈夫だ。苗カゴさ入れて滑車つけ縄で釣り上げで風呂さ入れてやる。お尻もどこもきれいになって寝かせどくから心配するな。その代わり死ぬなよ。死んでわがねよ」と言った。

今ここざ来て孫のような方がたに苗カゴでねのに入れてもらって感謝しています。一週間張り合いがあつて火曜日が待ちどおしい。もう死ぬということは考えられないんですよ。

身内の愛があり、温かい介護があるところ、老衰の中でも死の恐れはない。あるの

は「ありがとう」の思いだけ。

終わりよければすべてよし。愛があり、感謝で応^{こた}える。相互作用はいよいよ深め合う。それが良き終わり。感謝は祈りだからである。

私たちのホームの河原茂一郎さん（百二歳）は、「私は八年前に白骨になる身でした。任運荘に助けられました。百十歳まで生きてご恩送りをします」と今年も敬老会で語られた。

百一歳の羽田野モモエさんは水分のみの重篤^{じゆうとく}の床でなおも寮母への合掌を続けられている。残り日を意識をかきたてかきたて人間完成を期されているお姿に私たちは肅然^{しゆくぜん}、えりを正しめられる。

（一九九三年十月十三日）